

## ムンクの叫び

先日、ノルウェーの画家ムンクの代表作「叫び」のうちの1点がニューヨークでオークションにかけられ、手数料込みで約1億2千万ドル、日本円にして約96億円で落札されたとの報道がありました（5月4日付読売新聞）。

競売を実施したサザビーズによると、競売で売られた美術品としては、2010年5月に約1億650万ドルで落札されたピカソの「ヌード、観葉植物と胸像」が過去最高だったそうですから、今回の「叫び」はそれを上回る、文字通りの史上最高額となりました。

世の中には、とんでもないお金持ちがいるものだと思います。

96億円という金額を聞いて、私は、思い出したくもありませんが、今から20数年前に北海道で行われた「世界・食の祭典」のことを思い出しました。

「世界・食の祭典」は、当時道庁が総力を挙げて取り組んだ一大イベントでしたが、見事に失敗し90億円を超える損失を出してしまいました。ムンクの「叫び」の96億円というのは、芸術とは余りにもかけ離れた話であり、比較するも如何とは思いますが、その位凄い額だということです。

エドヴァルド・ムンクは、1863年12月にノルウェーのロイテンという所で生まれ、その翌年にはオスロに移住しています。成長の過程で、母親や姉を病気で失い、自身も病弱であった為、死というものを身近に感じていたと思われれます。彼は、人間の中にある孤独や嫉妬、不安といったものを人物画に表現していますが、幼い頃から死を身近に実感して来たことが、彼の芸術に大きな影響を与えたといわれています。

ムンクは、1944年1月オスロで亡くなっています。80歳でした。彼は、ノルウェーでは国民的画家として評価されており、ノルウェーの紙幣（1000ノルウェー・クローネ）に肖像画が描かれている程です。

「叫び」という絵は全部で4点あり、その内2点はムンク美術館に、1点はオスロ美術館にそれぞれ所蔵されており、今回競売に付されたのは個人が所蔵していたものです。

「叫び」という絵には、橋の上で、目を見開き、口を開いて何かを叫んでいるような人物が描かれています。しかし、その人物は耳を塞いでいます。聞き

たかないものから逃れようとしているようにも見えます。

薄暗く、淀んだ背景からは、自分の置かれている不安な状態を示しています。人は、押さえられない不安に遭遇したとき、何かを叫ばずにはおられません。しかし同時に、人々の不安な気持ちから逃れようとする叫び声もまた恐怖を煽ります。力なき者は、ひたすら、恐怖におののきながら耳を塞いで立ちつくすしかないのでしょうか。

ムンクの「叫び」は、自分の心の弱さを抉り出しているのかも知れません。

さて、ムンクの「叫び」という作品は余りにも有名ですから、競売で高値が付くのは分かりますが、それにしてもどうしてこんなに高い値が付くのだろうと思ってしまいます。美術品自体には、値段はあってないようなものですし、金持ちの道楽とってしまえばそれまでですが、少なくとも、購入者には、それだけの価値があったということでしょう。

絵の価値には3つの側面があると思います。

「作品の出来」、「作者は誰か」そして「作品の稀少性」ということです。

作品の出来が如何に良くても、作家が無名ですと評価額は低く押さえられますし、著名な画家の場合は、名前だけで高値が付いてしまいます。

今から10年程前のことですが、ゴッホの修業時代の油彩画「左向きの農婦の頭部」が売りに出されたことがありました。この絵は当初、作者不詳だったため落札予想価格は1～2万円だったのですが、競売の直前になって実はゴッホの真作だということが分かったのです。すると、その絵の落札額は一挙に跳ね上がって6600万円の値が付きました。

この絵を落札したのは、広島県のウッドワン美術館館長ですが、かれは、報道でその絵がゴッホの真作であることを知って入札に参加したということですから、ゴッホの名前に大枚を払ったようなものです。まあ、貧乏人の遠吠えみたいなものですが・・・。

人がその絵を欲しがるのは、その絵が素晴らしいだけでなく、世界に一つしかない、しかも再生不能の一品だからに他なりません。

他人の持っていない物を持っていたいというのは、人間の本能的な欲望といえます。でも、大抵の場合、その欲望を満足させるだけの力はありませんから、現実には妥協するのですが、自己満足のためにはいくらお金を掛けても良いという価値観と力の持ち主がいるということです。それがまた、美術品の流通を維持しているという面もあります。

そんなこんなで、ムンクの「叫び」には途轍もない高値が付いたのですが、余りの高値に今頃は、当のムンク自身が、墓場の中で驚きの叫びを上げているかも知れませんね。(塾頭 吉田 洋一)